

凡夫については示されず、浄土往生の行である五念門を修する行者としての菩薩と、観察の対象として浄土の菩薩の二種類が示されるのみである。

『論註』では、『浄土論』の菩薩の用例以外に阿弥陀仏の因位の法蔵菩薩を重視する。また行者としての菩薩の具体例として、龍樹・天親（世親）の二菩薩の名をあげる。さらに観察の対象としての浄土の菩薩についても観音・勢至の二菩薩の名をあげて代表させており、『大経』『観経』の説により浄土の菩薩の代表例として用いたものと考えられる。凡夫については『大智度論』『十住論』と共通する面もあるが、凡夫と『観経』の下々品が結びつけられたこと、「凡夫」が形容詞として用いられていることなどが特徴的であり、具体的な口業による罪（謗法罪）などが強調されるようになる。經典の上では別々に説かれていた凡夫と下三品を結びつけて理解するのは『論註』がはじめてである。

『論註』では無垢輪の説示を用いて、大乘菩薩道の根本精神である「上求菩提下化衆生」を示している。『論註』に示される凡夫、衆生、菩薩の関係性は、この「上求菩提下化衆生」を満足させるものである。菩薩（具体的には『浄土論』を著した世親）により、共に往生を願われた衆生こそ凡夫であり、その凡夫にも可能な大乘菩薩道を示そうとしたのである。

中国撰述の諸清規における葬送と唱衣法

金子 奈央

禅宗清規に記載される唱衣法―住持・僧侶の遺品を競売する

儀礼―については、主として『勅修百丈清規』（以下『勅規』と略す）を対象にその教義的・経済的意義について考察をまとめたことがある（金子奈央『勅修百丈清規』における唱衣法の意義―遺品の動きを中心に―『東アジア仏教研究』第九号、二〇一一年）。本発表では、唱衣法が記される現存最古の清規である『禅苑清規』から『勅規』までの間に成立した四清規―『入衆須知』・『叢林校定清規総要』・『禅林備用清規』・『幻住庵清規』―における唱衣法の記述につき、一連の葬送儀礼における位置付け・唱衣実施のための準備作業・教義的意義・競売される遺品の種別・経済的側面に焦点を絞って確認を取った。

禅宗清規に記載される葬送儀礼は二重葬の特徴をそなえており、『勅規』に記載される葬送の諸仏事からは、唱衣は住持や僧侶の遺体が適切に処理された後（火葬の際は骨化した後、土葬の際は入塔・撒土以後）―一次葬の完了後、二次葬の開始以前というタイミング―で行われると読み取れる。上記の四清規において、唱衣は遺体の一次処理（火葬など）が実施された後に行われると記される。いくつかの清規においては、「一次葬完了後・二次葬開始以前」の段階で実施されると記されることも確認できた。

実際に唱衣を実施するにあたって必要な準備作業―遺品の封鎖と管理・価値の決定・目録や帳簿の作成・儀礼に使用する札や券などの準備―については、記述の詳細さに差はあるものの、『入衆須知』を除くすべての清規に唱衣の準備作業に関する記述があり、こうした準備が必要であると認識されていたことが確認できた。

唱衣という儀礼の次第については、四清規のうち『禪林備用清規』が『勅規』と類似する詳細な次第を載せるものの、他の清規では唱衣実施の際の念誦・回向が記述の中心となっている。これら念誦・回向は『禪苑清規』から『勅規』に至るまで大きな変化は認められない。したがって四清規から読み取れる教義的意義―無常を表す・惜しむ心を打ち破る・死者の往生を祈る―についても、『禪苑清規』以来唱衣に求められた意義が踏襲されているといえる。但し『叢林校定清規總要』と『禪林備用清規』では、「無常を表す」・「惜しむ心を打ち破る」という意義について、唱衣念誦・回向以外に「烏波難陀比丘の故事」によっても示していることが確認できた。

実際に唱衣での競売に掛けられる遺品がどのようなものであったか、『禪苑清規』や『勅規』からは判然としないが、『勅規』には、僧侶が辨道具(三衣・坐具・偏衫・裙・直綴・鉢・錫杖・主杖・拂子・数珠・淨瓶・濾水囊・戒刀)を所有したであろう事、物品に限らず不動産にまで及ぶ財産を持った僧侶が存在したことが示唆されている。『禪林備用清規』においても、遺産としての不動産については叢林に所有権が移るという記述があるとともに、遺品として「書籍・佛像・經卷・翫具」があったらしいことが伺える。また『幻住庵清規』では、死亡した僧侶の遺品・価格目録の書式において、「袈裟・直綴・鉢盂・襖・鞋・袴・轆」といった日用品的な物品が遺品として挙げられている。

その他、『禪苑清規』や『勅規』の記述によれば、唱衣による収入から葬送の経費を引いた金額については、三等分して叢

林や僧侶に分配される。この「抽分錢」については、『入衆須知』・『叢林校定清規總要』には明確には記されないが、『禪林備用清規』では収入額の多寡による抽分の有無が記される。『幻住庵清規』も「諸方の古例」として「抽分錢」を記すが、『幻住庵清規』が菴居を基礎とする「一家之規」という性格を持ったためか、実行しないという記述があった。

三諦説におけるデイヴィッドソン哲学の位置づけ

渡辺 隆明

天台実相論は、現代の危機的な思想状況を打開する仏教思想の一つと考えられる。西洋思想と天台実相論とを比較検討するためには、天台実相論の中で西洋の哲学を位置づける必要がある。そのための作業の一環として、分析哲学者の一人であるドナルド・デイヴィッドソンの哲学を天台実相論の中に位置づけることを試みた。発表では、黒崎宏による仏教思想と西洋哲学との比較を手掛かりとして、天台教学とデイヴィッドソンの哲学を比較検討した。デイヴィッドソンの哲学が天台教学において一心三觀のうちの仮觀に位置せられることを示そうとしたのである。

天台大師智顗は法華經を根本經典とし、天台実相論を展開した。諸法実相を感得するために、智顗は円頓止觀を提示する。『摩訶止觀』で明らかにされる円頓止觀においては、空・仮・中の三諦の円融すなわち、即空・即仮・即中が目指される。こうした天台教学もまた、縁起的世界觀を通じて意味的世界觀を展開している。このことは、新田雅章の論文「中国天台におけ